

第一話 向宿の子もち地藏

子持地藏尊

奥多摩バイパスの多摩大橋北交差点を東に二百メートルほど行くと、斜めに北東に入る小道がある。これを百メートルばかり入った路傍に、およそ一間四方の小さな祠がある。あたりは福島町の、通称「向宿」と呼ばれる地域で、ふた昔ほど前までは、周囲を水田に囲まれた戸数三十軒ほどの小さな集落であった。現在は宅地化が進み、そんな昔の面影はないが、その一角に祠はひっそりとたたずんでいる。

祠の中には、子どもの前掛けや着物を幾重にも巻きつけ、花や千羽鶴で飾られた、ちようど赤ん坊ぐらいの背丈の小さなお地藏さまがまつられている。通称「向宿の子もち地藏」と呼ばれる石のお地藏さまである。

磨滅して読みにくいのが、台座には「宝暦十二年（一七六二）十月」「願主善兵衛」などの文字が刻まれ、造立年代と造立者が知られる。しかし、造立の由来や善兵衛がどのような人かは知る由もない。ただ、赤ん坊を抱いたその容貌から「子もち地藏」の名で古くから親しまれている。



平成8年11月に再建された祠

お地藏さまの言い伝え

このお地藏さまには次のような伝承がある。むかし、近所の子どもたちがお地藏さまを持ち出し、祠の北を流れる田用水「中沢堀」の流れにさらし、水浴びをして遊んでいた。ところが、そこを通りかかったある人が、「お地藏様を粗末にしてはいけない」と、子どもたちをしかりつけ、元の所に安置してしまった。

その夜、その人の夢枕にお地藏さまが現れ、「せつかく子どもたちと仲良く遊

んでいたのに、お前はなぜ私を一人ぼっちにさせてしまったのか……。」と言って悲しんだ、というのである。

また、ある時、老婆が祠の前を通りかかったら、子どもたちがその中に入って遊んでいた。老婆は「そんな所で遊ぶと罰があたるよ」と、小言を言った。その途端、老婆は足が痛くなり、やっこの思いで帰宅した。これはどうしたことかと主人に話すと、お地藏さまの罰があつたに相違ない、という。老婆は痛い足を引きずり、お地藏さまにお参りし、お詫びを言って帰ろうとしたら、すでに痛み

が引いていた。という話も伝わっている。

こうした伝承には、子どもをむやみにしかってはいけない、というような教訓がお地藏さまを通して語られているようにも思えるが、いずれにしても、子どもが大好きなお地藏さまであることがわかりただけだと思う。

今も続く信仰

こうしたお地藏さままであるから、昔から子どももの夜泣き、夜尿症、病気、けがなどに霊験があるとされ、近所の人々の信仰を集めている。医学の進歩していない昔はもちろん、今でも赤ん坊の夜泣き

などはしばしば親をこまらせる。現在でもなお信仰を集めているのは、こうした親の切実な願いによるものなのであろう。

参拝者は願い事が成就すると、子どももの着物や前掛けを奉納する。また、お地藏さまが着ている衣類を借用し、子どもに着せ、平癒へいゆすると新しいものを奉納するという人もいる。

一方、祠の中には「お札お札」が用意されている。いくばくかのお賽銭を奉納してこれを持ち帰り、直ればい



お地藏様のお札



平成 20 年 12 月 撮影

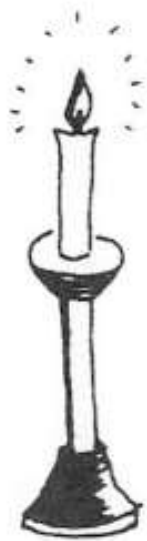
ろいろなお供え物をしてお礼参りをするといい。

このお地藏さまには、向宿の住民によって古くから講（信徒会）が組織され、管理がなされている。縁日は四月と十月の二十四日で、昔は露店が出たりして賑わいをみせた。現在は春の縁日のみ行なわれている。夕方から晩にかけて、僧侶の読経や百万遍、それに御詠歌の奉納もあり、ささやかではあるが、いかにも庶民的で素朴な縁日である。

路傍の小さなお地藏さまではあるが、庶民の習俗や生活史の一端をうかがうことのできる貴重な文化財といえるであろう。

（付記）

平成八年十一月、祠の老朽化にともない、地域住民の喜捨によって立派な祠が再建されました。お地藏様は今日でもなお、地域の人々によって大切にされ、篤い信仰を集めています。



（昭和五十五年五月一日号掲載）